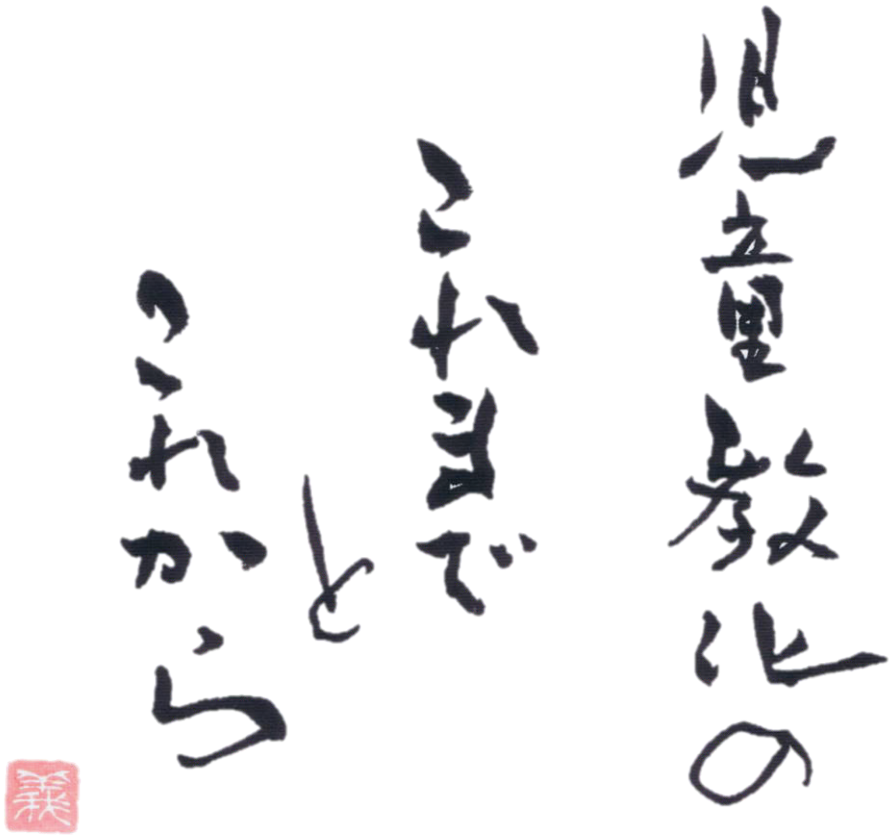
児童だより



・秋の研修会

児童教化の「これまで」と「これから」

（2019 年 11 月 18 日　@通覚寺）

２０２０年３月１日
真宗大谷派　東京教区
児童教化連盟　発行
〔事務局〕〒１１１－００３５
東京都台東区西浅草 1-6-6
通覚寺内
TEL０３－３８４４－００８３

特別号

児童教化のこれまでとこれから

２０１９年11月18日、東京１組通覚寺に於いて、「秋の研修会」を行いました。東京教区児童教化連盟は70年を越える歴史がありますが、それはどのような歩みであったのでしょうか。今回の「秋の研修会」では、「児童教化の「これまで」と「これから」」をテーマに「これまで」の　東京教区の児童教化の歴史と、そこに込められた願いを堀秀之さんに、そして「これから」の児童教化をどのように見据えていくかを酒井義一さんにお話しいただきました。

この度の研修会を終え、両氏のお話を多くの方に、更にはこれから児童教化に携わる方に広く伝え、残していきたいという思いから、講義録を作成いたしました。また紙面の最後には、東京教区児童教化連盟の略年表を付け加えましたので、併せてご覧いただきたいと思います。

講師①：堀　秀之　氏
（東京１組　來應寺　前住職）

焼け野原から

堀秀之です。今年で84歳になりました。今日は東京教区の児童教化連盟（以下、児連）が始まってからの話をさせていただきます。

戦争があり、１９４５（昭和20）年３月10日に東京大空襲で殆どの寺院が消失しました。いくつかの鉄筋コンクリートの建物の駆体は残りましたが、その中や木造の建物すべて燃え、浅草中が焦土と化したのです。

その後、終戦を迎え程間もなくの１９４７（昭和22）年秋頃から東京別院浅草本願寺（現在大谷派より離脱）を中心に都内寺院の有志の人たちが、伝道布教のための連盟を作りました。今でこそ浅草本願寺は離脱してしまいましたが、当時は別院としてあり、教務所や教区会館もあり教化伝道の中心に

なっていました。それからしばらくして「東京布教団」という組織ができました。各組の組長を中心に組織され、各寺院の住職が必ず所属し、3つの部が作られました。

・伝道部：別院の定例布教、巡回布教、報恩講布教（当時、別院報恩講は5日間行われ、大逮夜後からは一晩中『御伝鈔』各段のリレー法話が行われた）

・教養部：住職、寺族の研修を企画する。

・青少年部：青年部と児童部に分かれて活動。

児連という名前は後に付けられましたが、児連の組織はこの児童部が始まりだと思っています。

当時の児童教化活動

私は1958（昭和33）年に大学を出てすぐに住職になりました。その時の東京1組（浅草近辺の寺院の集まり）では宗恩寺の織田さん、専勝寺の碧海さん、善照寺の安藤さん、光桂寺の内藤さんなどが子どものための活動が好きで、童話や紙芝居、ペープサートなどを行っていました。浅草本願寺報恩講の子ども大会、東京博善（火葬場）の子ども会、八王子少年刑務所への慰問、各寺院の子ども会への巡回も行っていました。

そして特に熱心に取り組んだのは子ども会で使う教材作成です。大型紙芝居、ペープサート、人形劇。これらの教材と一緒にセリフを吹き込んだテープも作成し、そのテープに合わせて動かせば誰にでも演じられるように工夫しました。その時に作ったものが今でも大切に保存されています。これらの教材を見るととても懐かしく、とても楽しかったことを思い出します。

他にも浅草童話研究会（浄土宗が中心）、真宗児童協会（真宗高田派も一緒）など、他宗派との交流も行いました。

当時の子どもたちの遊びはメンコ、ビー玉、ベーゴマなどでした。そして子どもたちが「ガキ大将」を中心に群れを成して遊んでいました。それからテレビが普及しテレビゲーム、今ではスマホでしょうか。子どもたちが昔のように外で遊ばなくなりました。これからの児童教化はどのようになっていくかまた行っていくか、非常に難しい課題、そして問題を抱えているのだと思います。

児連の発足

そしていよいよ児連が発足します。1956（昭和31）年11月に全国規模で各地に児連を作る動きがあり、全国各地に児連が結成をされました。しかし東京教区において児連はすぐに結成されませんでした。そもそも児連という組織は子ども会や日曜学校を行っている寺院の連盟です。東京教区に於いては各寺院で開催される子ども会が少なかったことが考えられます。

それでも東京教区にも児連を結成させたいということで、子ども会結成寺院以外でも加盟できるようにして、1961（昭和36）年7月21日に「東京教区児童教化連盟」が結成されました。当時の役職として、代表委員に東京6組光圓寺の櫻田さん、委員長に東京5組報土寺の朝倉さんが就任しました。

サマーキャンプ

（寺院子弟研修会）

1971（昭和46）年7月に「寺院子弟研修会」が始まります。ここではお勤め稽古や法話などが多く取り入れられ、この研修会に参加すれば得度考査（僧侶になる前の試験）が免除されるようにという提案がされましたが、実現はされませんでした。実現はしませんでしたが、この研修会は回を重ねる度に参加人数がどんどん増えていきました。その参加していた子どもたちが今現在、東京教区の中心的立場になり活躍されていることは頼もしいことであり、とても良い研修会を開いたなと思っています。

この「寺院子弟研修会」が「サマーキャンプ」と名称を変えて現在に至るまで行われています。数えてみますと今年が49回の「サマーキャンプ」でした。来年（2020）は50回の記念の会になりますね。

そして1973（昭和48）年の春から、参加者の交流を更に深めるために「親鸞聖人お誕生のつどい」が開催されるようになり、児連の二大事業の形がこのように生まれました。

青少幼年の全国大会

また、児連の思い出としましては、様々な全国大会にも参加しました。１９６３（昭和38）年に石川県金沢市で行われた「全国青少年同朋大会（第５回大会）」に参加しました。次に１９７３（昭和48）年、真宗本廟（京都・東本願寺）で厳修されました、「親鸞聖人誕生８００年、立教開宗７５０年慶讃法要」の記念事業として様々な青少幼年に関わる大会が催され、東京教区の児連では「青少年結集大会」に参加しました。これらはスタッフだけの参加だったかもしれません。

そして１９９８（平成10）年「蓮如上人５００回御遠忌法要」が厳修される際には「青少幼年関係者結集大会　ＴＯＭＯワールド」が真宗本廟で開かれ、青少幼年５部門（児連、スカウト、仏青、合唱、保育）が集結しパレードなども行い盛大に盛り上がりました。

しかし２０１１（平成23）年の「宗祖親鸞聖人７５０回御遠忌」の際にはこのような青少幼年関係の団体が一堂に集う大会は開かれなかったと記憶しています。とても残念に思いました。５部門主催ではありませんでしたが、２０１１（平成23）年５月４日に「子ども御遠忌」という催事が開催されています。

ですから令和５（２０２３）年にお迎えする「親鸞聖人御誕生８５０年・立教開宗８００年慶讃法要」に向けての事業を考える中で、青少幼年関係団体が一堂に集まるような結集大会が開かれてもいいのではと思っているところです。

終わりに

最後に、昔、小さな子どもで参加をしていた人たちが、現在の児連のスタッフを担っています。この流れはとても凄いことだと感じています。しかし、今を生きる子どもたちの事情は、昔と比べると遊びも、考え方も大きく変わり、児連の活動は昔と比べると大変な問題や課題を抱えているかもしれません。そのような状況ではありますが、これからも児連の活動を皆さんで盛り上げていってほしいと思います。

また、本来の児連は一ヶ寺の子ども会の集まりです。「一ヶ寺一子ども会」結成に向けても頑張ってほしいと思います。

私はもう年なのでなかなか参加できませんが、これからも皆さんのお力で東京教区の児連が益々の充実、発展することを願って、お話を終わりたいと思います。

講師②：酒井 義一 氏
（東京5組 存明寺 住職）

私と児連

私は堀さんが作られた資料によりますと第14回（1984年・昭和59年）から約20年間参加をしていました。この時、私と同世代の仲間がたくさんいて、堀さんは中堅の先輩でした。同じく中堅に菊池さん（東京1組光圓寺）がおられ、さらに上の方に、内藤さん（東京1組光桂寺）や土岐さん（東京1組等光寺）や碧海さん（東京1組専勝寺）がいらっしゃいました。20年間の関わりの中で忘れられない経験をたくさんさせていただきました。今はOBとなり児連の現場にはいません。児連という場所を次の世代に渡していきたいという思いから席を譲らせていただきました。しかし児童教化を卒業したわけではなく、今でも現役で、自坊や違う場所で活動をしています。

今日は児童教化の「これから」というご依頼でしたが、そのことを話す上で「これまで」ということも少し触れさせていただきたいと思います。

児連は表現する場

まず私にとって児連とは、「表現をする場」を与えて頂いたということを強く思います。子どもたちに何かを伝えるということですが、その時に法話という形もありましたし、スタンツという形、キャンプファイヤーという形で伝えたこともありました。脚本などを書いて芝居がかった形で伝えるということに力を入れていた時代でした。スタッフが集まり、子どもたちに何を伝えていくのかということ話し合い「サマーキャンプ」を作っていく醍醐味みたいなものを感じていました。

児連は出会いの場

次に児連には「出会い」ということが欠かせなかったと思っています。児連にはスタッフとの出会いと子どもたちとの出会いがセットで用意されていたということです。

ところで、なぜ私が児連にかか

わったかといいますと、子ども会活動にはほとんど関心はありませんでした。しかし、お声がけしてもらい…と言うか捕まったというか…１９８２（昭和57）年に自坊に帰ってきた時に近所の遠藤さん（東京５組乗満寺）に「つべこべ言わずについて来い」と言われ、拉致されるような形で参加しました（笑）。しかし、その様なお声がけがなければ、私に児童教化というご縁はなかったと思っています。ですから、これから教区に帰ってくる人たちに対しても積極的に誘う、誘い倒すということが必要になってくると思います。

痛恨の出来事

児童教化にかかわる中で痛恨の出来事がありました。児連に関わるようになってから４、５年後、本山で行われている「全国児童夏のつどい（現・同朋ジュニア大会）」に参加するようになりました。その時に班担（班担当スタッフ）を一緒やったのが、ある教区の新人スタッフでした。全体や班の流れとして、子どもたちと「このようなことを話そう」「このようなことをして楽しもう」というプランの準備をしました。しかし女の子が、私たちが準備をしたプランに、ことごとく背を向けていくということがありました。またその子に同調する子もあり、最終的に押し入れにこもるなど、関わりを持ってくれませんでした。最初は優しく接していたのですが、段々と言葉もきつくなり、最終的に一緒に活動することができなくなってしまいました。

その子はそのまま帰っていったのですが、残された感想文を見ると「つまらなかった。二度と来ません」と書かれていました。一緒に活動をした新人スタッフと一緒に「いったいこの４日間、自分たちは何をしていたのか」と打ちひしがれながら強く反省をしました。その時の悔しさ、申し訳なさがずっと残っていて、私には忘れられない、そして忘れてはいけない出来事となりました。

「正しさ」の押し付け

今でもあの時の事を思い出しながら考えるのですが、あの時に私たちにあったのは「正しさ」ということです。「こうすることが正しい児童教化なんだ」という。だから、この「正しさ」に乗って来ない子は、言うことを聞かない悪い子という目で相手を見てしまった。だから、そういう結果をもたらしてしまったのだと思います。

青少幼年センターでは「ひとりと出会う」「ひとりから始める」ということが大きなキーワードにな

っていますが、その時のことを思い出してみますと、私たちが敷いたレールの上に、いかにして子どもたちを乗せるかということばかり考えていて、その子たちの生の声をきちんと聞く、その子と出会うということが欠けていたのだと思います。

その子に対して申し訳ないという気持ちがあると共に、大切なことを教えてくれたと、今では思っています。

お寺の子ども会

お寺の子ども会を１９９２年から始めました。当初は春、夏、冬の学校が休みの時に行いました。私の子ども会のイメージは東京教区の児連でしたので、イベントを企画するなど、一日がかりの子ども会を続けてきました。しかし、段々と疲れていきました。常に何か新しいイベントを考えなくてはいけない。多い時には１００人もの子どもたちが集まり「大成功だ」と思っている反面、来る子どもたちの名前も顔も覚えられず、裏方で準備をしている。そのような状況で２０００年を最後に子ども会が自然消滅してしまいました。

当時も私は青少幼年センターのスタッフとして関わっていたのですが、その時に担当していたのが『ひとりからはじめる子ども会―子ども会開設の手引き―』の作成です。大掛かりに子どもを集めて行うのが子ども会なのではなく、「ひとりと出会う」ということを基本において、ひとりからはじめていこうではないかという願いを主にして、この手引書を作りました。２００４年７月のことです。

私はこの本を作りながら、子ども会を行っていない者が「簡単に子ども会はできる」という冊子の編集をしているというウソ臭さを感じ、この冊子をテキストとした子ども会の第１号を自分で作ろうということで準備をしました。これまでの様にイベントにこだわるのではなく、参加人数を誇るような子ども会ではなく、２００４年４月から毎月の定員制の子ども会が始まりました。私を含め、お互いが名前で呼び合えるような子ども会になり、今年で15年目を迎えました。

小さな求道者とともに歩む

次に「これから」ということですが、何か新しいことを始めるということではなく、歩みの中で大切にしたいことをいくつか確認したいと思います。このことは『真宗』誌（２０１７年11月号、12月号）にも書かせていただきましたが、今まで私が教わってきたこと

でもありますし、これからも大事にしていかなくてはならないことだと思っています。

一つ目は「小さな求道者とともに歩む」ということです。昔、全国児連の研修会のテーマにもなった言葉です。私はこの言葉を聞いた時に、とても衝撃的な思いをしました。それは実際に関わる子どもたちのことを「小さな求道者」と見ていなかったからです。子どもたちはいろいろな形で子ども会に参加してくるわけですが、子どもたち自身が「自分は求道者なんだ」と言ってくるわけではありませんし、「人生とは何か？」という難しい問いを言うわけではありません。むしろ「子ども語」というような形で「よっちゃん、今日ね、こういったことがあったんだよ」と私に語りかけてくれることがあります。そのような時には、じっくりとその話を聞こうと「その時どんなふうに思ったの？」と聞いてみます。話をしていく中で、子どもたち一人ひとりが居場所を求めているひとりの人間だということが伝わってきます。もちろん、いつもというわけではありませんが、子どもたちとの会話を通して、この言葉を思い起こします。子どもといえども、ひとりの人間であって、いやな出来事もあるでしょうし、不安もあるでしょうし、居場所や仲間を求めている。そのことを今までも大事にしてきたし、これからも大事にしていきたいと思います。

ひとりと出会う

二つ目は「ひとりと出会う」ということです。子ども会を主催しますと、どうしても参加人数というものが気になってしまいます。しかし、数が多ければ成功かというと、そうではないわけです。基本から言えば、そこに集まった子どもの中で、「ひとり」と親しくなり、時間を過ごすということが大切なことであります。そのような人間と人間の関係が、そこに集まった子ども数だけ生まれる。先ほど、お寺の子ども会で１００の子どもが集まったと言いましたが、今から考えれば集まった１００人の子どもたちのことを、自分の活動を誇るためのアクセサリーようにしていたのだと思います。そうではなく「ひとりと出会う」そのことを大事にしてほしいと思います。

共に居場所を創る

三つ目は「共に居場所を創る」ということです。「共創」という言葉で言われることもあります。子どもたちを楽しませるために場所を作る事も大事ですが、子どもたちと共に創っていくことが大切だ

と思います。これは大人が集まる会もそうです。お互いに安心して居られる場を共に創っていく。誰かが一方的に場を作っていくのではなく、一人ひとりの雰囲気を出しながら、その場に居る人の力を借りながら、そして信頼しながらひとつの場所を作っていく。これは大谷派の児童教化における大事な「いのち」であって、今までも大事にされてきたし、これからもそのことを大事にしていきたいと思います。

東京教区においての子ども会の結成率は全国から比べるとだいぶ低いです。それは様々な理由が考えられますが、とても厳しい状況にあります。しかし、「無理をしながらも無理をせず」という表現になりますが、居場所を共に創るということを大事にしていきたいと思います。

年表を持つということ

先ほど堀さんから東京教区の児童教化の歴史を伺いましたが、大谷派全体の児童教化を含めた青少幼年の歴史については『青少幼年教化指針』という冊子がありまして、２０１１年、「宗祖親鸞聖人７５０回御遠忌」に合わせて作られました。ここで初めて大谷派青少幼年の歴史が世に出ました。なんと驚くことに、大谷派は長い間、青少幼年教化の年表すら整理・編集・出版してこなかったのです。

これまで青少幼年を管轄する部署はコロコロと変わることが繰り返され、青少幼年センターができたのは最近のことであります。その青少幼年センターの仕事として年表を作成するということとなり、『真宗』誌などを片っ端から読み、大谷派の青少幼年の動きというものを一つの年表にまとめました。それが『青少幼年教化指針』の中にある年表です。

年表を持つということは、私たちの教団にどのような歩みや課題があるのかということを明らかにしていくということでもあります。私は戦後から同朋会運動発足までを担当して調べました。その中で明らかになったのは１９６１（昭和36）年、「宗祖親鸞聖人７００回御遠忌」（以下、「７００回忌」）が行われました。これに向けて青少幼年活動が飛躍的に盛んになっていきます。

「７００回忌」が始まる少し前、１９５５（昭和30）年に「全国仏教青年大会」が長崎で開催され、１３００人が集まります。これを皮切りに翌年、１９５６（昭和31）年に大谷派児童教化連盟、大谷派仏教青年連盟（仏青）、大谷派スカウト連合協議会が結成されました。そこから各団体が組織的な動きをしていく中で「７００回忌」に合わせて、全国から多くの人が集う

わけです。この時の教勢調査によりますと、

花まつり　２１６３ヶ寺
子ども会　１０９５ヶ寺
日曜学校　７７２ヶ寺
スカウト　１５４団体
仏青　１０６０ヶ寺

という集計結果が残っています。ですから、「７００回忌」に向けて、ものすごい勢いで子ども会が盛んになっていったのです。

問題はそのあとにどうなっていったのかということです。「７００回忌」が終わった後もこの熱を冷まさないような活動が続けられてきたにも関わらず、終わると何事もなかったかのように日常に戻っていったということが、年表を通して明らかになってきました。これはただ単に日常に戻ったわけではなく「このままではいけない‼」と叫びながら戻っていったのであります。

その後、１９９８（平成10）年に「蓮如上人５００回御遠忌」が行われ、２０１１（平成23）年に「宗祖親鸞聖人７５０回御遠忌」が行われました。しかし、先と同じように御遠忌に向けては盛り上がりますが、御遠忌が終わると徐々に何事もなかったかのように日常に戻っていく。そのような歴史を繰り返しているように感じますが、いかがでしょうか。

慶讃法要を我が事として

２０２３年に「親鸞聖人御誕生８５０年・立教開宗８００年慶讃法要」をお迎えするわけですが、この慶讃法要をどのようにして迎えていけばいいのかについて、私の思いを話したいと思います。

２０２３年まであと４年ですが、この年はあくまで本山での法要が行われる年ということであります。現在、東京教区では慶讃法要をどのようにお勤めするかという検討会議が開かれています。昨年の７月に教区会・教区門徒会で、東京教区でも慶讃法要をお勤めすることが承認されました。この検討会議のメンバーを見ると、私も含めだいぶ高齢の人たちという印象です。しかし、この検討会議は基本の計画を立てるということであって、来年の２月には解散します。その基本計画ができてから東京教区の次世代を担う方々がその流れを受けて、東京教区の慶讃法要が形作られていくわけです。厳修されるのは、おそらく２０２５年くらいになると思います。

ですから、２０２３年で慶讃法要が終わるのではなく、２０２５年の東京教区の慶讃法要、またその後も各寺院でも慶讃法要が勤められることと思いますので、しばらくの間は慶讃法要がテーマになってくるということが想像されま

す。

しかし、この教団に覆っている慶讃法要の風は逆風のように感じています。「また寄付か。また動員か」という、その二つのことに象徴されるようにかなりの逆風が吹いていると感じます。私はそのことについてどうこう言える立場ではありませんが、慶讃法要を寄付と動員という形で見ていく限り、本山が行う慶讃法要として終わってしまうのではないか。そしてそれを批判するだけで終わってしまうのではないかというような危惧を抱いています。

そうではなくて、一人ひとり、それぞれの慶讃法要というものがどのようにしたら成り立つのかということを、力を入れて考えていく時が来ているのだと、自分のこととして思います。私はこの慶讃法要に向けて、自坊の事業をテコ入れしたいと思っています。これは何か新しい事業を始めるのではなく、今までの事業を見直して宗祖親鸞聖人のお心に適っているのかということを見直すチャンスにするべきではないかと考えているからです。

目指すところは慶讃法要ではない

私は現在、本山の慶讃法要事業で行われる「子どものつどい」のプロジェクトと、先ほどお話ししました東京教区の慶讃法要検討会議に関わっているのですが、２０２３年（本山）、２０２５年（教区）にイベントを行うという発想は、もう越えるべきだと考えています。そういったことはもう既に求められていないのではないかと思っているからです。私たちが今見据えるのは２０４８年、また２０６１年だと思います。この年は「蓮如上人５５０回御遠忌」そして「宗祖親鸞聖人８００回御遠忌」の年です。今から計算すると29年後、42年後になるわけです。ですから私はこの世にいないわけです。いないのですが、２０２３年をどのように迎えるかではなく、その先の２０４８年、２０６１年という、先を見すえるべきです。まだまだ先の話のように思えますが、42年後ですと私の子どもが67才になっています。まだ見ぬ私の孫が30才くらいになっているかもしれません。その人たちが中心になっている時代であり、確実に来る時代です。その時に何を表現する教団になっているのかだと思います。その表現の内容は当たり前のことですが、教えの確かさ、教えに出遇うということ。そしてそのことの広さ、深さ、温かさというものを、今表現しなければ未来に伝わっていかないのだと強く思っています。

終わりに

本日は児童教化の「これから」というテーマをいただきましたが、そのことは「これまで」ということと決して無関係ではありません。「これまで」の歩みを振り返りつつも、「これから」私たちは何を獲得し、何を次に伝えていくのか、表現していくのかといえば、王道を行くしかないということだと思います。教えに出会う確かさ、温かさというものを児童教化という形で表現していくという、この一点しかないと思っています。

ここで『真宗』誌に書かせていただいた文章を読ませていただきます。

仏法に出遇わずに
人生を終えてはいけない

真宗誌に毎回連載されているこの「児童教化のページ」の第一号には次のような言葉が掲載されている。

比丘等よ、（中略）浄潔なる法を説け、また浄行を明かにせよ。汚れ少き生をうけたる衆生もあらん、彼等法を聞かずば終に滅亡せん。彼等は法を知る者とならざるべからず。

（『児童と宗教』第一巻第一号）

《現代語訳》

あなたよ、あなたにまで伝わった浄らかな教えを自らの言葉で表現せよ。真実に拠って生きよ。汚れ少ない生をうけた衆生がいる。彼等がもしも法を聞くことがなければ、将来の繁栄はなく、滅んでしまうことだろう。彼等は仏法に出遇わなければならない。仏法に出遇わずに人生を終えてはいけない。

汚れ少ない生を受けた衆生とは、青少幼年のことである。「人として誕生した青少幼年たちよ。仏法に出遇わなければならない。仏法に出遇わずに人生を終えてはいけない。」それは真剣な叫び声である。

やがて二〇二三年には宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が勤まる。この法要は、青少幼年教化が大きなテーマとなることであろう。

慶讃法要を荘厳するために青少幼年が動員されるのではなく、青少幼年一人ひとりの存在を荘厳するような慶讃法要をお勤めしていきたいものだ。

そのためには「仏法に遇わずに人生を終えてはいけない」という願いを、あらゆる人々と共に、目に見える具体的な形にしていくことが、今を生きる私たちの使命なのではないだろうか。

慶讃法要をそのような動きの確認点に、そして、そのような動きの出発点にしていきたいと願う。（『真宗』２０１７年12月）

「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」は青少幼年教化が大きなテーマになると思っていますし、しなければならないと思っています。「青少年一人ひとりの存在を荘厳する」とは、慶讃法要を立派に行ったという功績のために青少幼年が全国から集められるのではなく、各地に生きる青少幼年一人ひとりに光を届けていく、光に出遇っていただくということです。このような慶讃法要を勤めるということです。この文章を書いたのは2年前ですが、今の思いとさほど変わっていません。教えに出会うという王道をいかに表現していくことができるのかということを思っています。

もう一つ文章を紹介します。これは全国から20名程が集まり宗務審議会というものが組織されて作成された文章です。慶讃法要をどのような理念でお勤めしていくべきなのかを話し合い、文章を作り、宗務総長に提出したものです。

宗務審議会「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要基本計画に関する委員会」で作成された慶讃法要の基本理念

1、慶讃法要の願い

私たちは人間としてこの世に誕生した。それは、縁さえ熟せば苦しみや悲しみをかかえるということである。立教開宗とは、そのような苦悩をかかえる人間をけっして見捨てない世界があることを顕らかにした、浄土真宗誕生の高らかな宣言である。

２０２３年に「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」を迎える。それは、人間として誕生した私たちが、苦悩の人間を照らし続ける教えに出遇う時である。人に出遇い、言葉に出遇い、教えに出遇うことは大いなる慶びである。その慶びを、すべての人々と共にする慶讃法要としたい。

（中略）

5、明日へ

２０６１年の宗祖親鸞聖人八百回忌をイメージしてみよう。「真宗大谷派は聞くことと語り合うことを大切にする教団」「青少幼年と共に歩み続ける教団」…。そのような生々溌溂たる教団をつくりだしていきたい。そのために問われているのは、今を生きる私の姿勢である。

この慶讃法要を無駄に過ごしてはならない。起ちあがろう。衣服（生きる姿勢）を整えよう。聞き、考え、語ることのできる私になろう。若い世代と共に一歩を踏み出していこう。すべての人々に教えを手渡していこう。

教えに出遇う慶びをすべての人々と共にしたい。教えに出遇わずに人生を終えてはならない。私がこの世に誕生し、生きているのは、「あなたをけっして見捨てない」という教えに出遇うためなのだから。

このような文章を作りました。これまで申してきました通り、「これから」ということを考えた時の基本姿勢とは、一人ひとりが生身の人間であり、様々な課題を抱えながらも、それらを仏縁として教えに出遇っていくということです。児童教化もその流れと変わるわけではないので、そのようなことを児童教化の基本姿勢に据えながら児連は児連でやるべきことがあるでしょう。特にこの東京教区では「宗祖親鸞聖人750回御遠忌」の際に「お寺の子ども会サポートプラン」というものが生まれ、このことをずっと考えていくことができる機関があります。しかし、機関ができてそれで十分かといえばそうではなく、長いこと子ども会結成に向けて手を挙げる人が居なかったそうですね。それから少し風が吹き始めていろいろな形で子ども会というものが立ち上がってきていると聞いています。

そういうことで言いますと慶讃法要に向けて、東京教区に児童教化の風を吹かせていくということは、私たちが真剣に考えなくてはいけないことだと思います。やはり見るべきは2061年。計算するとその時の「サマーキャンプ」は第91回を数えていることでしょう。その時になっても「児連に行けば何かがある」と思って人が集うような場所を開いていけるかどうかが慶讃法要から問われているのだと思います。

あせらず、くらべず、あきらめず。お互いに丁寧に歩んでいきましょう。

東京教区児童教化連盟年表

年度		委員長	サマーキャンプ（寺院子弟研修会）	出来事
1945	昭20			（東）…東京教区 （宗）…宗派　（社）…社会
				（社）終戦
1946	昭21			（宗）真宗大谷派宗憲発布（10月20日施行）
1947	昭22			（東）大谷派教化連盟児童部発足

1948	昭23				
1949	昭24			（宗）蓮如上人450回忌	
（略）					
1953	昭28			（東）東京布教団児童部発足	
（略）					
1956	昭31			（宗）大谷派児童教化連盟発足	
（略）					
1961	昭36	**朝倉　義俊** 東京5組 報土寺		（宗）親鸞聖人700回忌 （東）東京教区児童教化連盟発足	
1962	昭37				
1963	昭38				
1964	昭39			（社）東京オリンピック	
（略）					
1971	昭46		第1回	箱根冨士見荘（神奈川）	（東）「寺院子弟研修会」始まる（現・サマーキャンプ）
1972	昭47		第2回	和楽荘（栃木）	
1973	昭48	**高田　良栄** 元・栃木組 泰澄寺	第3回	かもしか荘（栃木）	（宗）親鸞聖人お誕生800年・立教開宗750年 （宗）全国児童夏のつどい開催（現・同朋ジュニア大会） （宗）東本願寺池の平青少年センター完成 （東）「親鸞聖人お誕生のつどい」始まる
1974	昭49		第4回	稲田西念寺（茨城）	
1975	昭50		第5回	戸隠水野民宿（長野）	

1976	昭51		第6回	かもしか荘（栃木）	
1977	昭52		第7回	那須ばしょう荘（栃木）	
1978	昭53		第8回	日光湯元白根荘（栃木）	
1979	昭54		第9回	草津温泉一田屋（群馬）	（宗）東京本願寺院議会宗派離脱議決（1981年6月15日、東京都庁は離脱を認証）
1980	昭55		第10回	秩父法雲寺（埼玉）	
1981	昭56		第11回	磯部保養センター（群馬）	（宗）新宗憲公布（同日施行）
1982	昭57	**織田　一** 東京1組 宗恩寺	第12回	寄居保養センター（埼玉）	
1983	昭58		第13回	かもしか荘（栃木）	
1984	昭59		第14回	木曽浄龍寺（長野）	
1985	昭60		第15回	日光光徳ロッジ（栃木）	
1986	昭61		第16回	稲田西念寺（茨城）	
1987	昭62		第17回	野辺山愛岳ヒュッテ（長野）	
1988	昭63		第18回	絵原村神戸園（東京）	
1989	平1	**碧海　寿覚** 東京1組 専勝寺	第19回	なかのビレッジ（群馬）	（宗）第1回同朋ジュニア大会 （東）東本願寺「真宗会館」完成
1990	平2		第20回	ヴィラ雨畑（山梨）	（東）『児連だより』創刊号発行 （東）「寺院子弟研修会」から「サマーキャンプ」へ名称変更
1991	平3	**内藤　義雄** 東京1組 光桂寺	第21回	ロッジ和田峠（長野）	
1992	平4		第22回	秩父おがの山荘（埼玉）	
1993	平5		第23回	かじか荘（栃木）	
1994	平6	**土岐　誓三** 東京1組 等光寺	第24回	池の平青少年センター（新潟）	（宗）テキスト『いのち』発行
1995	平7		第25回	池の平青少年センター（新潟）	（社）阪神淡路大震災（1/17）

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	
	平8	平9	平10	平11	平12	平13	平14	平15	平16	平17	平18	平19	平20	平21	平22	
	織田 繁 東京1組 宗恩寺			**須賀 力** 東京5組 道教寺			**堀 秀隆** 東京1組 來應寺						**秦 秀人** 湘南組 淨眞寺			
	第26回	第27回	第28回	第29回	第30回	第31回	第32回	第33回	第34回	第35回	第36回	第37回	第38回	第39回	第40回	
	南アルプス夜叉神峠（山梨）	池の平青少年センター（新潟）	ロッジ和田峠（長野）	川場村（群馬）	池の平青少年センター（新潟）	奥多摩町氷川キャンプ場（東京）	池の平青少年センター（新潟）	なかのビレッジ（群馬）	国立那須甲子少年自然の家（栃木）	池の平青少年センター	神奈川県立足柄ふれあいの村（神奈川）	群馬赤城林間学園	池の平青少幼年センター（新潟）	山梨県立なかとみ青少年自然の里（山梨） テーマ：ひかり	千葉県立手賀の丘少年自然の家（千葉） テーマ：今、いのちがあなたを生きている	
			（宗）蓮如上人500回忌 **（東）「お誕生のつどい」で本山「こども御遠忌のつどい」に参加**	（宗）『真宗子ども手帳』発行			（宗）青少幼年センター準備室設置	（宗）『ひとりからはじめる子ども会―子ども会開設の手引き』発行				**（東）「ハイティーンのつどい」始まる（～2017）**	（宗）『ひとりからはじめる子ども会ゲーム集』発行 **（東）事業にテーマを付けはじめる**	（宗）青少幼年センター設置 **（東）事務局交代時期の規約変更（7月←4月に繰り上げ）**	（社）東日本大震災（3／11）	

2011	平23	旦保 雅人 東京7組 宗泉寺	第41回	池の平青少幼年センター（新潟） テーマ：自然 ～震災を通していのちをみつめる～	（宗）親鸞聖人750回御遠忌 （宗）本山「子ども御遠忌」開催 （東）震災のため「お誕生のつどい」を中止
2012	平24		第42回	彩の国グリーンビレッジ（埼玉） テーマ：生きているということ	（東）「じれん子ども会（年4回／於：真宗会館）」始まる（～2017）
2013	平25		第43回	国立中央青少年交流の家（静岡） テーマ：ほんとうに尊いこと	（宗）教如上人400回忌 （東）「お誕生のつどい」で本山「子どものつどいin東本願寺」に参加
2014	平26	西尾 朋央 東京3組 福成寺	第44回	コテージ森林村（東京） テーマ：川とあそぼう	（東）東京教区「子どもごえんき」開催
2015	平27		第45回	泊まれる学校さる小（群馬） テーマ：「みんな」と「ひとり」	（東）『児連だより』第48号より紙面カラー化
2016	平28		第46回	池の平青少幼年センター テーマ：いただきますってなぁに？	（東）『児連だより』第50号発行
2017	平29	稲垣 和弘 東京1組 通覚寺	第47回	愛川ふれあいの村（神奈川） テーマ：ともだちってなあに？	（東）児童教化連盟70年記念懇親会（屋形船）
2018	平30		第48回	池の平青少幼年センター（新潟） テーマ：自然から教わる私	（東）「子ども報恩講」始まる
2019	令1		第49回	千葉県立手賀の丘少年自然の家（千葉） テーマ：変わっていくこと　変わらないこと	

参考資料

『青少幼年教化指針第一部 - 青少幼年教化の歩みと展望 - 』（真宗大谷派青少幼年センター）

『東京一組の歴史』（真宗大谷派東京教区東京一組）

『児連だより』（真宗大谷派東京教区児童教化連盟）

2019年秋の研修会資料「寺院子弟研修会の歴史」（堀　秀之　作成）

【表紙題字】酒井　義一氏（東京五組存明寺）